フィリピン型言語の能格論争に関する一考察

今西一太（株式会社エス・アイ 代表取締役）[1]

1. 導入

能格性の定義としては一般的に Dixon (1994) のいう「他動詞節の被動者項と自動詞節の唯一項が同じ扱い」という定義が受け入れられている（以下は Dixon 1994: 10 よりジルバル語の例）。

(1) a. ŋuma　　banaga-nʸu　　「父が（S）戻ってきた」
父(絶対)　戻る-非未来
b. yabu　　ŋuma-ŋgu　　bura-n　　「父が（A）母を（P）見た」
母(絶対)　父-能　　見る-非未来

(1) においては他動詞節の被動者（ここでは P と呼ぶ）と自動詞節の唯一の項（S と呼ぶ）が同じ標示を受けており、これは絶対格と呼ばれる。それに対して他動詞節の動作主（A と呼ぶ）のみが別の標示を受けており、これは能格と呼ばれる。このような、S と P が同じ標示を受ける現象を能格性と呼ぶのが一般的である。

一方、いわゆる「フィリピン型」の言語を能格性と分析すべきかどうかについてな様々な議論が生じている。フィリピン型の言語とは主にオーストロネシア語族の言語のうち、台湾、フィリピンやその他一部の地域で話されている言語の事を指す。本稿ではこの議論について考察を加え、フィリピン型言語と能格性の関係に一石を投じることを目的とする。

2. フィリピン型言語の能格論と否定論

「フィリピン型の言語」の大きな特徴として、動作主態（AV：agent/actor voice）と被動斜体（PV：patient voice）の両方において動詞が形態的に有標であることが挙げられる。以下 (2) は台湾原住民語の一つ、アミ語の例である。

(2) a. mi-patay=to　　kako　　to=dadipis
AV-死=完了　　1 単主　　対=ゴキブリ
「私はゴキブリを殺しました」
b. ma-patay=to=ako　　ko=dadipis
PV-死=完了=1 単属　　主=ゴキブリ
「私はゴキブリを殺しました」（直訳：ゴキブリは私に殺されました）

[1] imanishik923@gmail.com

(2a) は AV 動作主態で、mi- という接頭辞があり、(2b) は PV 被動者体で ma- という接頭辞がついている。このように、例えば対格言語であれば能動態が無標で受動態が有標、のように、態の間の無標性が一見明らかではないのがフィリピン型の言語の特徴である。

2.1. フィリピン型言語は能格性を持つという主張

フィリピン型の言語が能格言語であるという主張は、Gerdtz (1988) におけるイロカノ語の分析、Huang (1994) におけるアタヤル語の分析、Liao (2004) や Aldridge (2012) における台湾原住民・フィリピンの言語の分析など多く存在する。彼らの主張を簡単にまとめると、「AV と PV のどちらも形態的に有標だが、その他の基準で分析すると PV の方が無標であることが明らかであり、PV が基本となる他動詞文、AV は逆受動態に当たる有標な形式である」というものである。以下、Aldridge (2012) におけるタガログ語の分析を挙げる（グロスは Aldridge の表記をそのまま記載している）。

(3)

a. B<in>ili　ng　babae　*ang isda.*　（PV、もしくは無標の他動詞文）
<TR.PRV>buy　ERG　woman　ABS　fish
‘The woman bought the fish.’

b. D<um>ating　*ang babae.*　（自動詞文）
<INTR.PRV>arrive　ABS　woman
‘The woman arrived.’

c. B<um>ili　*ang babae*　ng　isda.　（AV、もしくは逆受動態）
<INTR.PRV>buy　ABS　woman　OBL　fish
‘The woman bought a fish.’

能格分析ではなく AV、PV で分析した場合、(3a) は PV、(3b) は自動詞文、(3c) は AV となる。これに対し、Aldridge は (3a) を無標の他動詞文、(3c)を逆受動態であると分析している。その根拠として、(3c) の構文とチュクチ語などのその他の能格言語における逆受動との共通点、例えば斜格の名詞句（3c の isda など）は不定の解釈しかできないこと、atelic な解釈になることなどを挙げている。Liao (2004) もこれに近い分析を行い、(3a) に当たる文は名詞句が 2 つとも項としての特徴を持つ一方、(3c) に当たる文は被動者の名詞句が項としての特徴を持たないと分析している。

同様の分析は台湾原住民語の文法書にもあり、例えば Teng (2008) は台湾原住民語であるパイワン語に関して、Wu (2006) はアミ語に関してそれぞれ能格性を持つと分析している。例えば Teng は以下の 5 つの診断基準を用いて、プユマ語の AV における被動者名詞句が核となる項であるかどうかを分析している。

・動詞に接語として付加されるか
・動詞連続において省略されうるか

・話題化して文頭に来ることができるか
・数量詞遊離で修飾されうるか
・従属節から主節に「上がる」ことができるか

詳細は省くが、Teng はこれらの基準で AV、PV のそれぞれの名詞句について分析した結果、AV における被動者名詞句は項的な特徴を持たない（non-core である、ただし adjunct ではない）、と分析している。この分析によると AV における項は動作主のみであり、全ての AV は自動詞文となる。

また、Huang (1994) はアタヤル語の談話における AV と PV の頻度を分析している。それよると、AV:PV が 30:52 となり、PV の方が頻度が高い。それを根拠に PV の方が無標であるという主張を行っている。

「能格論者」は以上のような根拠により、AV = 自動詞節/逆受動態、PV = 無標の他動詞節、と分析を行っている。

ただし、フィリピン型に属する言語でも言語によってさまざまな変種がある。例えば、上の「AV の被動者名詞句が不定の解釈しかできない」などの特徴は少なくともいくつかの言語では当てはまらない。スバノン語では AV の被動者名詞句が定の解釈を受けることも可能であるし（O'brien 2016: 9[2]）、アミ語では AV と PV は時制・相によって使い分けがあり（AV は進行や未来で使う傾向があり、PV は過去や完了で使う傾向がある）、AV の被動者名詞句に指示代名詞を付けて定の解釈をすることも可能である。このような特徴を分析した結果、「能格性の度合い」のような形でいくつかのオーストロネシア語の能格性の強さを比べている研究もある（Huang and Lin 2012）。

2.2. フィリピン型言語は能格性を持たないという主張

一方「フィリピン型言語を能格言語と言うべきではない」という主張も存在する。代表的なものは Foley (2008) である。彼は AV を逆受動と呼ぶことに関し、逆受動と呼ぶからには通言語的に記録されている逆受動と多くの特徴を共有している必要がある、と述べ、「逆受動と自動詞接辞が同じ例は通常ない（タガログ語では(3b) (3c) が同じ形式になっている）」「AV/PV いずれも有標である」ことなどを根拠に、フィリピン型の言語は能格言語と異なった型に属していると考え、これらは「対称的な態交替の言語」と呼ぶべきである、として、能格分析を排斥している。

その他、例えば Shibatani (1988) は、フィリピン型言語で「主格」と呼ばれる格は日本語の「は」のように話題を示す形態素であり、能格言語の絶対格とは異なると述べている。そして、フィリピン型言語と能格言語には類似点もあるが、類似しているからといって同一視することは慎むべきである、と主張している。以下は彼がタガログ語などについて例示している、動名詞のような形態素を動詞に付けた際に出て来る「裸の」格標示と、AV、PV それぞれの格標示を図式的にしめしたものである。

[2] ただし、この論文は学生による進行中のプロジェクトを論文化したものであり、未完成の研究である。

(4)
a. **GRD**-V　GEN-A　ACC-P 「A が P を V すること」
b. **A**V　**NOM**-A　ACC-P 「A は P を V する」
c. **P**V　GEN-A　**NOM**-P 「A に P は V される」
d. **GRD**-V　GEN-S 「S が V すること」

3. 本発表の方法論

本発表では「能格性」の定義を厳密に行うことにより、フィリピン型言語に関して能格分析と能格否定分析が共存している理由を指摘する。第 3 節ではまず能格性の定義を厳密に行うため、抽象概念の定義の方法論を整理する。

Denett (1991: 27-29) は「地球の重力の中心」という抽象的概念に関する定義を議論している。彼は、「地球の重力の中心」と「自分が今までなくした靴下の中心」という 2 つの実体を持たない抽象概念を比較し、前者は科学的な議論に活用できる「よい（good）」抽象概念であるため存在価値があるが、後者は何の役にも立たないため存在価値がない抽象概念である、と述べている。彼の意見によると、抽象的概念と言うのはそれが科学的議論に便利で役に立つかどうかがその概念の存在価値を決める。

また、Turner (2011: 85-89) は「創発的（emergent）」 という用語の定義についてどの強さに設定すれば事象の分析に一番便利かを議論している。「創発」とは複雑系の議論で良く用いられる概念で、体系内部の個々の部分の特徴から単純な因果関係で導き出されないような特徴が体系全体として見られる場合についてこの概念がよく用いられる。

Turner (2011: 87) はこの「創発的」について、定義を強くしすぎる、つまり当てはまる条件を厳しくしすぎた場合も、定義を弱くしすぎた場合、つまり当てはまる条件をゆるくしすぎた場合も、どちらも科学的議論に活用できる便利な抽象概念とはならない、と述べている。

表　Turner (2011: 87) の表を日本語でまとめ直したもの

弱すぎる定義	創発的とは体系全体からなんらかの影響を受けており、個別の部分には無い特徴の事である。ミキサーにかけてバラバラにした後に消えてしまう特徴はすべて創発的である。
中間の定義	上の特徴を持ち、なおかつ単純な因果関係に還元できないものは創発的である。
強すぎる定義「形而上学的」	付随した変化が各部分に一切起きない状態で体系全体に変化が起きる場合、体系の中のある特徴は創発的である

Turner は「弱すぎる定義」について植物の窒素合成の例を出してこの定義が使いづらいことを説明している。つまり、植物をミキサーにかけたらこの特徴は消えてしまうにもかかわらず、単純な因果関係に還元できてしまうという点で創発的とは言いづらい、とのことである。また、「強すぎる定義」に関しては詳細な議論はしていないが、「形而上学的」という言葉を

使っていることからわかるように、物理的に実在する存在に関する議論には応用しづらいととらえているようである。その上で、「中間の定義」が一番創発性の議論をするうえで使いやすい定義であるため、この定義を採用すると述べている。

本発表では以上の両者の観点を統合し、**「能格性」を、物理的実在・実体のない、人間の認識の中にしか存在しない抽象概念であると考え、能格性をどの強さで定義すれば言語の分析・比較に一番役に立つ「よい」抽象概念を作ることができるか**、という観点から能格性の定義を行い、フィリピン型言語の位置づけを検討する。つまり、「能格性」というのは言語そのものが持つパラメーターなどではなく、例えば英語の「第一文型」などの概念と同様、人間が言語を認識する際に便宜的に活用するための抽象概念である、と考える。

4. 能格性の定義

本節では「無標の 2 項節」および「能格性」の定義を議論する。能格性の議論をするうえで「無標の二項節」の概念は必須である。なぜなら、無標性を考慮に入れない場合、受動態も能格性と判断されてしまうからである（詳細は後述）。

Liao (2004) は無標の 2 項節の定義を議論している。それによると、以下の基準を満たすものは無標の 2 項節であると判断することができる。

・動詞の標示が無標である
・談話における頻度が高い
・分布が広い（命令文などの文でも使用することができる）
・習得の順序が早い
・その節のパターンを生産的・規則的に作り出すことができる
・意味的な他動性が高い

Liao はこの中の一部を「基準とするには問題がある」と述べている。例えば、「動詞の標示が無標である」という基準について、一部のポリネシアの言語でで「無標の 2 項節」と扱われている節において動詞の標示が有標であることを挙げ、基準として使用しないと述べている。

しかし上記の基準は一般的に無標な二項節を示すのに問題がないと本発表では判断し、全てを無標の二項節の定義に利用することとする。そして、この Liao の定義全てを満たすものを完全に無標な、つまり原型的な 2 項節と考える。

能格性の定義は A だけが違う標示で、P と S が同じ標示を受けることである。ただし、**2 項節と能格性**について、少なくとも以下の 3 種類の定義の強さが可能であり、それによって能格性の適用範囲が変わる。

a) 能格性 A（一番強い定義）: S と、Liao の言及する定義全てを満たす原型的（完全無標な）二項節の P が同じ標示である。

フィリピン型言語は AV も PV も形態的に有標である。つまり、a) の定義を採用した場合、フィリピン型言語には定義全てを満たす原型的な二項節が（少なくとも広範で生産的な形では）存在しないため、そもそも能格性がないことになる。これは「フィリピン型言語の能格性否定論者」の Foley や Shibatani などの立場に近く、オーストラリア原住民語などの研究者も、無標の二項節の定義を意識しているかどうかはおいておいて、この立場を取るものが多いようである（角田太作 私信、野島本奏 私信）

b) 能格性 B（中間）: S と、定義全ては満たさないがその多くを満たす比較的無標な二項節の P が同じ標示である場合も能格性に含む。

この定義を採用した場合、例えば「動詞の標示が無標である」という基準を満たさないフィリピン型言語でも能格性の範疇に含めることができる。そしてこれがまさに Liao や Aldridge などの「能格論者」の主張するフィリピン型言語の能格性である。

Foley などの動詞標示の有標性を無標二項節の定義として重要視する研究者はこの観点を取らないため、フィリピン型言語は能格性とは言えないと主張している。

c) 能格性 C（一番弱い定義）: 二項節における有標・無標性を一切無視し、とにかく参与者が 2 つあれば 2 項節と考える。

もしこの定義を採用してしまうと、以下の (4) のような受動態（明らかに有標である二項節）における P が S と同じ標示を受けるため、「受動態は能格性である」という主張が可能になる。そのため、この定義を採用する論者は存在しないと思われる。Turner の窒素合成の議論と同様、定義を弱くして範囲を拡張しすぎると議論に活用できない不便な概念になってしまう例である。

(5) a. 次郎<u>が</u>(P)太郎<u>に</u>(A)殴られた。
　b. 太郎<u>が</u>(S)走った。

5. 能格性と対照的な態交替の類型論

以上の能格性に関する議論を念頭に置いたうえで、Foley のいう「対称的な態交替」と上記の三種類の能格性を一覧にし、能格性 A を「狭義の能格性」、能格性 B を「広義の能格性」としてまとめたのが以下の表である。

型	対格型	対称的/広義の対格型	対称的	対称的/広義の能格型	狭義の能格型
P=S 標示節	有標: 受動態	比較的有標	同程度	比較的無標	無標
A=S 標示節	無標	比較的無標	同程度	比較的有標	有標: 逆受動
例	日本語/英語	恐らく存在しない	スバノン語？	タガログ語/アタヤル語	ジルバル語
					能格性 A

<table>
<tr><td></td><td></td><td>能格性 B</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">能格性 C</td></tr>
</table>

このように、フィリピン型言語の記述において「能格性」という概念を用いることができるかどうかは、無標の二項節と能格性の定義の強さによっているのであり、「フィリピン型言語が能格性を持つかどうか」という議論は結局「フィリピン型言語を記述する際に能格性という概念を用いると便利かどうか、能格性の概念の強弱をどこに設定すれば通言語的な比較と分類に一番役に立ち、分かりやすいか」という議論に帰結する。

個人的な意見としては、「フィリピン型言語は能格性を持つ、持たない」という議論が生じている時点で既に通言語的な比較の便利さに障害が出ていると考える。フィリピン型言語について議論する際は「広義の能格性」「広義の逆受動」などの新しい範疇を設定し、「狭義の能格性（原型的能格性）」とは異なった特徴であることを明確にして議論した方が分類や理解に便利なのではないかと思う。

6. 結論

本発表では、「能格性」「無標の二項節」を、物理的実在を持たない抽象概念であると考え、その定義から考え直すことにより、フィリピン型言語の「能格性」と原型的能格言語の能格性の関係を明らかにした。「能格性」というのは「地球の重力の中心」あるいは数学における「直線」などの概念と同じような抽象的な概念であるととらえることにより、フィリピン型言語の能格論争が生じている原因の 1 つを明らかにすることが可能である。また、論争が生じている時点でフィリピン型言語まで含む能格性の概念は不便な概念となっているととらえ、原型的能格言語の能格性とフィリピン型言語の能格性を何らかの形で区別する方が便利なのではないか、と主張した。

参考文献

Aldridge, Edith (2012) "Antipassive and Ergativity in Tagalog" *Lingua* 122:192-203.

Denett, Daniel C. (1991) "Real patterns." *The Jorunal of Philosophy* 88, 27-51.

Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity.* Cambridge University Press.

Foley, Willian (2008) "The place of Philippine languages in a typology of voice systems." In: Austin, P., Musgrave, S. (Eds.), *Voice and Grammatical Relations in Austronesian Languages*, 22-44. Center for the Study of Language and Information, Stanford.

Gertdz, Donna, B. (1988) "Antipassitves and causatives in Ilokano: evidence for an ergative analysis." In: R. McGinn (Ed.), *Studies in Austronesian Linguistics*, 295–231.

Huang, Lillian M. (1994) "Ergativity in Atayal." *Oceanic Linguistics* 33, 129-143.

Liao, Hsiu Chuan (2004) *Transivitity and ergativity in Formosan and Philippine languages*. PhD. thesis. University of Hawai'i.

Obrien, Colleen (2016) "Are Philippine languages ergative? Evidence from Western Subanon." *University of Hawai'i at Manoa: Working Papers in Linguistics* 47(2).

Teng, Stacy Fang Ching (2008) *A reference grammar of Puyuma: an Austronesian language in Taiwan.* Pacific Linguistics, 595.

Turner, Derek. (2011) *Paleontology: a philosophical introduction.* Cambridge University Press.

Wu, Joy Jing-lan (2006) *Verb classification, case marking, and grammatical relations in Amis*. The State University of New York at Buffalo, PhD thesis.

Huang, Zong-Rong and Kuo-Chiao Jason Lin (2012) "Placing Atayal on the ergative continuum." *LSA Annual Meeting Extended Abstracts 2012*.